

ともに築いた繁栄

南山城に寄り添う 6つのグスク



01 新垣グスク

字新垣の丘陵上にあり、南山城と関係のあるグスクの1つとされています。丘陵頂部近くのグスク入り口近くにはカー(井泉)を中心に野面積みの石積みが巡らされた屋敷跡が確認されており、グスク土器や陶磁器類が遺物として出土しています。



03 与座グスク

字与座の丘陵上にあり、別名「ハジシグスク」と言われています。現在、グスクの規模は分かっていませんが、岩盤地形を利用した石積みが確認されています。伝承によると、南山城よりも前に建てられたグスクで、城主は与座の大主という人物だと言われています。



04 大城森グスク

大城森グスクは別名「タマター(二股)グスク」とも呼ばれ、字大里の丘陵上にあり、グスク北側の崖下には報得川が流れています。丘陵頂部は東西に分かれており、東はオトー山、西はオカー山と呼ばれ、城主が初代・承察度の伯父もしくは叔父の居城であったと言われています。グスクの中心部とみられる西側は石積みが巡り、東側には拝所や墓、南側の石積みには城門が残るほか、城門に向けた階段状の石積みも確認されています。青磁、染付、グスク土器が出土しています。



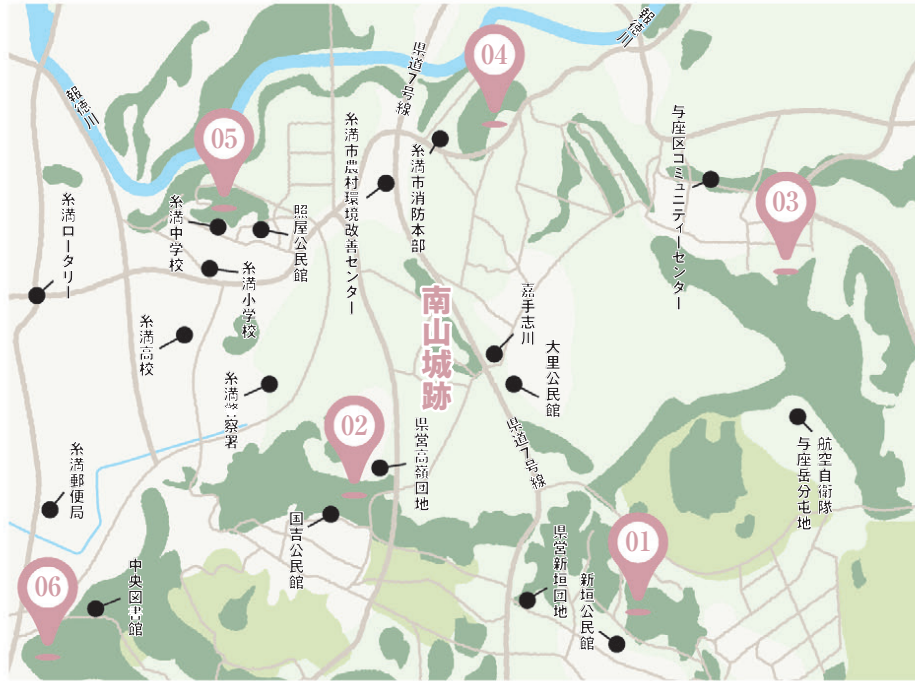
05 照屋グスク

照屋グスクは別名「ウチバルグスク」とも呼ばれ、糸満中学校に隣接し、グスク北側の崖下には報得川が流れています。伝承によれば、中国との貿易時に報得川河口近くが船着き場だったとされ、南山城の貿易品保管庫や防塞であったと言われています。グスク内には墓、拝所などがありますが、浄水場建設に伴い、石積みの多くが破壊されています。グスク土器、中国産陶磁器、カムイヤキなどが遺物として出土しています。



02 国吉グスク

字国吉の丘陵上にあり、照屋グスク、大城森グスクとともに南山城の防御拠点の1つだったと言われています。複数の郭から構成されており、野面積みの石積みグスクを巡っています。青磁、カムイヤキ、グスク土器、石器などが遺物として出土しています。



06 真栄里グスク

字真栄里の丘陵上の先端にあり、国吉グスクと関係のあるグスクと言われています。城門は東側に開口しており、不定形ではありますが切石状に整形されています。グスク内には墓や拝所のほか、北側には野面積みの石積みが残されています。グスク土器や青磁などが遺物として出土しています。

現在、糸満市は39ものグスクが立地する県内最多の地域。なかでも、南山城跡を中心に存在する6つのグスクは、まるで南山城に寄り添うさまから「衛星的グスク」と表現する研究者も。

南山城とともに一時代の繁栄を築いたそれぞれのグスクを紹介しますので、今年の夏休みは、子どもたちと一緒に南山の謎について調べてみませんか？

南山滅亡の予言？

南山滅亡の原因と言われる事件を知っていますか？

それは、南山最後の王となつた他魯毎が、後に三山を統一することになる当時の中山王・尚巴志から、自身の金屏風と嘉手志川を交換しないかと持ちかけられたことから始まります。

他魯毎は金屏風ほしさのあまり、この交換を受け入れ、与座の大主と国吉グスクの城主・国吉大屋久がその引き渡しを行いました。しかし、国吉大屋久はこの交換が災いをもたらすとして、他魯毎へ嘉手志川を取り戻すよう進言。しかし、他魯毎はこの進言を受け入れず、国吉大屋久を謹慎処分としました。

この交換の結果、尚巴志は自身の指示に従う者だけに湧き水を与えたため、南山の住民は他魯毎の元から離れ、中山の攻撃に耐えられず、滅亡したとされています。



護佐丸の遺児は？

糸満で育った？

琉球王国統に貢献したとされ、現代でも有名な武将・護佐丸は、琉球王国統一後も要職を歴任。しかし、6代目琉球国王・尚泰久の時代に、彼にひけを取らず有名な阿麻和利の策略により、王族へ反乱するものとして王府軍に攻撃され、最後は自害するという悲劇の結末を迎えたとされています。

王府軍から攻撃を受けた際、護佐丸の三男・盛親は、彼の乳母(母に変わり育てる女性)の故郷である国吉へ逃れたと言われ、当時の城主・国吉又比屋は、盛親をかくまい、手厚く養育したと伝えられています。

その後、盛親は琉球王国の第二尚氏王朝を築いた尚円王により取り立てられ、豊見城地域を拝領し、国吉又比屋も功績をたたえられて国吉村の要職を任せられたと言います。

